

某嬢の如き皆狩野友信翁の門に贅を執りき、ワ氏は既に其の國に歸り今なほ留りて學べる中にてはジョセフィン、ハイド嬢尤も熱心にて此に二年餘その進歩いと著るしく見る人舌を捲くばかりなるが狩野派の畫を學ぶにつけても肝要なるは人體の寫生なりとて嚮きの日その師と仰く友信翁と共に東京美術學校に行きて久保田校長に逢ひ同校の専科生^{〔課〕}たらむことを囑したるに久保田氏も大にその特志に感じて之を許せしかば嬢の悦び噓へん方なく去る十日より日々同校に通ひつゝありといふ 外國の婦人にて日本の美術學校に入りたるは嬢を以て嚆矢とす、扱て嬢は雪舟を享拜することと太だ篤く古今第一の畫聖と稱しその典型に入らむことをのみ努め業成りて本國に歸る上は水墨もて壁畫を^{〔不明〕}□らむと語れる由 嬢にして怠らずむば米國の女雪信^{〔舟カ〕}たることまた難からず 最^いとたのもしき話ならずや

ジョセフィン・ハイドに次いで明治三十七年にはやはりアメリカ人女性マリー・イーストレークが西洋画撰科に入学し、同三十八年以降明治期末までの間は毎年二、三名の外國人が入学している。これを國別に見ると清國人が一番多く、次いでアメリカと韓国・朝鮮、インドとシヤムの順となっている。また、科別にみると、全員撰科に入学しており、専攻は西洋画が特別に多く、次いで漆工、日本画、金工、彫刻の順となっている。

朝鮮人留学生の中には西洋画科を首席で卒業し、母國の洋画興隆に貢献した金觀鎬のような人もいる。彼は正五年撰科卒業で、卒業制作「夕ぐれ」と自画像を提出し、九十五点の最高得点で異彩を

放ち、新聞にとり上げられた。

タイ人留学生で明治三十八年金工撰科に入ったチャルン・スラナートと漆工撰科に入ったボンブー・ワナートは母國のキングス・カレッジ卒業後皇后の命令で留学したもので、ともに本校を卒業し、研究科で学んで帰国した。三木栄川の報告（『東京美術学校校友会月報』第十六卷第五号）によればチャルンは帰国後年とともに昇進し、名もビヤ・トワラボディと変わり、貴族階級のうちの第二位に至った。ボンブー（三木は「ボーン」と記している。）は皇族出身で中佐相当官として宮内省に勤務している。しかし、ともに本校で習った技術を一度も生かしたことはないという。

⑥ アール・ヌーヴォーと図案革新氣運・図案科改革

パリ万国博覧会を見物した日本の美術家たちが強い衝撃を受けたことは既に述べたが、当時のパリはアール・ヌーヴォーの全盛時代であり、博覧会場にはそうした製品が示威的に展示されていたから、低迷を続けていた自國の図案ないし工芸との対比においてその新鮮さは日本の美術家の心を揺さぶるに十分の迫力を持っていた。それ以前は純粹美術と応用美術を故意に区分し、応用美術を見下していた美術家も図案への関心を強め、彼らが帰国するや明治三十四年頃から各種の図案団体が生まれ、各地で図案の懸賞募集が盛んに行われるようになった。それまでの日本の工芸は、応用美術という語が示すように概ね絵画を工芸図案に應用して精巧なものを作り上げることに終始し、また本校の図案科においては、本来は創造のための古典研究であるべき筈のものが往々にして古典からの借用とな

り、それが新鮮味のある図案の制作を妨げていたが、ここに漸くにして図案革新への氣運が生じたのであった。この氣運について『読売新聞』（明治三十五年一月四日）は次のような論説を掲げている。

デザイン時代來らんとす

新年刊行の新聞雜誌其他各種の出刷物^{〔版〕}を見るに、例のアルヌーヴォー式と稱へて、昨年以來流行を始めたる畫模様を表紙其他に刷り込みたるもの頗る多きを加へたり、意匠の嶄新にして繪柄の注意を惹き易きによるべく、當分ハ新意匠として之より一層の流行を見るに至るべきハ疑ふべからず、亦以て世人が漸く意匠なるものに意を留むるに至りしを見るべし。

アルヌーヴォー式ハ佛國流行の最新模倣たるハ固より言ふまでもなし、然れども此意匠ハ必ずしも佛國美術家の考案のみに成りたるにあらず、此かる式ハ我國に於ても往時光琳、乾山、抱一等の製作に於て之を見るを得べく、寧ろ此等の我古代美術品が海外に輸出せられて、巧慧なる佛人の寓目を経、之を意匠の材料として茲に一種新奇のアルヌーヴォー式と化けたるものなるべしとの説眞に近きが如し、此く我古代の製作も一たび佛人の意匠に觸るれば、忽ち新奇の畫風となる、皆意匠の力なりと謂はざるべからず。豈啻にアルヌーヴォー式のみならんや、百般の製作皆意匠の力を假らざるものなし、意匠の力を假て始めて活動するものにあらざるハなし、由來意匠^{（一）}といへば、世人ハ單に美術竝に美術工藝に附帶したるものと思惟するの弊あるも、是世人の誤解なり、意匠の應用せらるゝもの又應用せざるべからざるものハ決して美術

品若くハ美術工藝品のみに止まらず、凡そ千種萬態の製作物、大ハ建築より小ハ日用の品に至るまで、苟くも嗜好に投じ、販路を求め、利益を博せんと欲するもの、皆悉く意匠の力に頼らざる能はず、成るべく人の注意を惹かんとする、成るべく人の嗜好に投ぜんとする、粧飾の趣味、實用の便利、成るべく兼ね得て全からしめんとする、成るべく僅少の勞費により成るべく短小の時日より成るべく精巧にして成るべく低廉なる製作を出さんとする、凡そ是等如何なる製作に従事する者も必ず必要とする所の要件たり、而して是等ハ皆一に意匠の力に頼らざるべからず、意匠の發達が製作の進歩と相待たざるべからざるや言はずして知るべし、然るに我日本に於てハ從來意匠を全く度外に措き、暗闘摸索以て諸般の製作に従事し、又従事しつゝあるハ一大缺點なりと謂はざるべからず。

予輩をして忌憚なく言はしむれば、日本の製作にハ意匠なるものなし、其視て以て意匠とする所のものハ、唯昔より同一のものを襲踏するか、左なくバ多少の變改を加ふるのみにて陳套を繰返へすに過ぎず、故に日本にハ未だ以て意匠家と稱するに足るべきものなく、偶ま之あるも社會より厚遇せられず、殆んど糊口に窮する者すらなきにあらず、歐米諸國に在てハ百般の製作先づ重きを意匠に置き、一個の皿にも必ず意匠あり、一片の布にも必ず意匠あり、現に前年の巴里博覽會にてハ鍋の意匠によりて金牌を得たるものすらありたり、意匠の重ぜらるゝこと此の如くなるが故に、如何なる小規模の工場にても必ず圖案家を重聘せざるハなしといふ、意匠なき我製作を以て歐米の物品と競争す、其世人の注

意を惹くに於て、其顧客の嗜好に投ずるに於て、其販路を擴張するに於て、到底彼の敵にあらざるや言ふを須たざるなり。

一昨年の巴里博覽會以來意匠圖案の必要亦漸く我國にも唱道せられ、現に高等工業學校にてハ特に圖案科を設置し、頃日又圖案の研究を目的とする有志の團體新に創設せらるゝあり、所謂デザイン時代漸く將に來らんとす、思ふに今後意匠なき製作ハ全く價値なきものとして一顧にだも値せざる日の到來する其れ或ひハ遠きにあらざるべき歟、一言以て世人の注意を促す。

アール・ヌーヴォーの刺激を受けて帰国し、東京で率先して図案の振興につとめたのは福地復一（天香）であった。福地は本書第一巻に記したように、明治二十九年本校図案科初代教授となったが、校長岡倉覚三と対立して辞職し、同三十年に帝國図案社を設立して各種図案の注文に応じ、一方では『日本帝國美術略史』（公文版はパリ万国博覽會の際に配布され、邦文版は『稿本日本帝國美術略史』として明治三十四年に出版された。）の編纂主任（岡倉覚三の後任）をつとめた。

彼はパリ万国博の際には農商務省臨時博覽會事務局官長林忠正に随行渡仏し、『日本帝國美術略史』に関する用語や帝國博物館命令による仏英主要博物館組織管理法・列品分類陳列法調査を遂行する傍ら、裝飾図案その他美術上の研究を遂げ、参考資料を多数持ち帰り、それらを研究しながら図案の制作を試みた（本学芸術資料館所蔵正木直彦宛福地復一書簡同封自筆履歴書、明治三十四年六月二十五日『東京日日新聞』所載無記菴（大村西崖）著「芸苑饒舌」）。帰国は明治三十三年十二月であるが、翌三十四年三月には彼は風月堂米津常次郎



福地復一 明治29年ころ

一部と考えられる。新帰朝図案家として一躍有名になった福地は、同年十一月に尾崎紅葉、小山正太郎、福井江亭らと日本図案会を創立し、盛んに図案展覽會を開き、図案の振興につとめた。同会は福地が死去した明治四十二年頃まで活発な活動を続け、その展覽會には坂井紅児、十二町貞吉、沢田誠一郎、渡辺香涯、結城素明その他本校関係者も多く出品した。

福地はアール・ヌーヴォー心酔者と看做され、「福地アルヌボー君」などと呼ばれたりしたが（明治三十六年六月三日『都新聞』）、彼が新聞、雑誌等に発表した論説を読むと、決してアール・ヌーヴォー模倣主義ではなかったことがわかる。例えば明治三十四年七月三、四、六日の『読売新聞』に連載された「裝飾図案談」であるが、福地はアール・ヌーヴォーについて、その起源、各国における相連、日本その他の意匠の影響、実物写生を基礎としていること、価値、色彩の妙等について述べ、次いで仏国の意匠家の研究法、日本の画家の写生不足、日本が意匠流行の源となるべきこと、建築上

とともに、パリから持ち帰った美術品、工芸品、諸種の印刷物の展覽會を開き、アール・ヌーヴォーを紹介した。本学芸術資料館所蔵のアール・ヌーヴォーのポスター（『東京芸術大学芸術資料館蔵品目録・版画』所載）はその

のアー・ル・ヌーヴォーと鉄骨との関係、ビングの工場等について論じており、特にアー・ル・ヌーヴォーの価値という点については、それが意匠として優れているか、あるいは意匠の理論に適合しているかは疑問であり、適用の範囲も限られていると述べている。そして、パリでは足利時代以後の日本のものを新意匠の材料にしているが、日本の図案家はむしろ優れた意匠を多く含む足利以前のものを研究し、最新式意匠を生み出すべきだと主張しているのである。

福地らの日本図案会とは別に、明治三十四年九月には創設後間もない東京高等工業学校（校長手島精一）工業図案科の関係者や本校の関係者が中心となって大日本図案協会を創立し、盛んに図案展覧会を開き、『機関誌』『図案』（同年十二月創刊）を発行した。

一方、京都では明治三十四年三月、京都市立美術工芸学校図案科生徒の図案展に中沢岩太がパリから持ち帰った新図案が展示され、注目を集めた。また、同校図案科教諭の神坂雪佳が図案研究のために欧州に派遣されたのも同年である。翌三十五年三月には京都高等工芸学校が新設され、中沢岩太が校長に就任し、同年八月にはフランス留学から帰国した浅井忠がここに赴任して図案の指導にあたった。浅井はアー・ル・ヌーヴォーを和風化して陶器の絵付を試みるなどし、翌三十六年には神坂雪佳、清水六兵衛らとともに「遊陶園」（園長中沢岩太）を設立。また、三十九年には「京漆園」の設立に尽力するなど、京都で新しいデザインの育成につとめた。

このように明治三十四年にはアー・ル・ヌーヴォーの刺激による図案革新の動きが活発化するが、これを本校に限ってみると、およそ次のとおりである。まず、黒田清輝は既述のように文部省から美術



『図案』第1号



同 右

に関する制度や絵画教授法の研究を命ぜられてフランスへ再留学したのであるが、序でに東宮御所造営のための室内装飾の取調べも囑託されていたので、必然的に建築や図案に関心を寄せた。その点に

ついでパリで行動を共にした和田英作は、「先生は別に宮内省から東宮御造營の用務を託されてゐたので、その方面の人々、つまり建築家やデザイナーとの交渉が随分忙しいやうでありました」（「画壇の四十年、足跡を顧みて」(三十八)昭和九年十月三十一日『東京毎夕新聞』)と記している。黒田は帰国後、恐らくその種の資料を東宮御所御造營局に提出したに違いない。彼はほかにも種々の目録、絵はがき、書物などを持ち帰った様子で、それらは当時彼のもとに寄宿していた杉浦非水(明治三十四年本校日本画選科卒)を刺激してデザイナーの道を歩ませることとなった。非水の「自伝六十年」(『広告界』昭和十年)を読むと、彼が一人立ちするまでに黒田のバックアップが大きく作用したことがわかる。なお、非水は明治三十四年の白馬会展覧会の際は会場の外観が「五彩絢爛たる純アール・ヌーボー式」に飾られ、自分もアール・ヌーヴォー式図案の大作を出品したが、これには黒田も大賛成で、サインの入れ所まで配慮してくれたとも言っている。

黒田の帰国は明治三十四年五月で、次いで岡田三郎助が翌三十五年一月に、和田英作が同三十六年七月に留学から帰国している。岡田の場合はパリで図案とどのような関わりを持ったか不明であるが、帰国後の彼の本校におけるポストは図案科教授であり、また、終生工芸や図案の振興に尽くしたことを考えれば、恐らく普通以上に図案への関心は深く、パリから持ち帰った資料も多かったに違いないと思われる。

和田英作の場合は履歴書(本学蔵)に「明治三十三年」三月ヨリアカデミー、コロロツシニ入學 ラファエル、コラン クールトア

兩氏ニ就キ木炭畫及油畫ヲ修業シ又ユウジェーヌ、グラッセ氏ニ就キ裝飾美術修業」とあり、また、『美術新報』第二卷第十号(明治三十六年八月五日)には「○和田英作氏の歸朝 文部省留學生として佛國巴里に遊學せし洋畫家和田英作氏は去月十五日歸朝せしが氏は巴里グラッセ氏の門に入り昨年七月迄アール、デコラチーフ(裝飾意匠)を研究し其後はループル、ルユクサンブル等の博物館美術館にて古名畫の模寫をなし去る一月より五月迄伊太利に遊び古名作の研究モザイクの調査をなし由にて古名畫の模寫及び裝飾に關する圖案等を齎し歸りたり」とも記されており、彼がアール・ヌーヴォーの代表的作家の一人であるグラッセ(Eugène Grasset 1841-1917)に師事したことや、図案等を持ち帰ったことがわかる。彼は帰国の約三ヶ月後には西洋画科教授に就任し、図案科には直接関与しなかったが、図案に対しては並々ならぬ関心を持っていた。

彼らの帰国は前述のような一般の図案革新氣運と相俟つて本校内にも図案振興、あるいは図案科改革の動きを呼び起こした。明治三十五年七月二十五日発行の『図按』第五号は

東京美術學校にては過般より繪畫科生徒全體に圖案を科したるが好果を得たれば今秋始業の期より大に圖案の時間を多くし益々發達を計る計畫ありとぞ

と、新しい氣運の到来を報じている。また、校長の正木直彦にしてからが、アール・ヌーヴォーの隆盛を目撃して帰国したためか、この問題には非常に積極的であった。次の記事が示すように彼はポケ

ットマネーで懸賞図案募集を行うなどして図案振興に一役買っている。

正木美術學校長の圖案獎勵

東京美術學校校長正木直彦氏は、近頃圖案獎勵の目的より、自費で、懸賞課題を出し、同校内職員生徒に限って、考案させて居る。さて、その第一回の課題は「菊」といふので、應募圖案の中、優等と認められたのは即ち本紙前項に掲げたものである。續いて其第二回課題に授したが、それは第五回内國勸業博覽會に於て授與する賞牌、賞證、并に褒狀等の圖案で、その種類項目は左の通りである。

- 甲 名譽賞牌（金銀の二種）圓形直徑一寸八分
但製圖は四倍大即直徑七寸二分
- 乙 一等賞牌（銀製）
二等賞牌（鍍銀製）
三等賞牌（銅製） 大さ前項に同じ
- 丙 紀念賞牌（銀反銅製の二種）大さ前項に同じ
- 丁 賞牌の賞證
褒狀 大さ美濃紙大
- 一 甲乙丙は各一様の圖案にて足る 但し表裏の圖を要す 丁は賞證并褒賞は別様の圖案を要す
- 一 圖案の趣向には總裁殿下の御肖像を用うることは許可なし 但御紋章は差支なし
- 一 一人にて一部又は全部を考案すること素より妨なし
- 一 圖案用紙は美濃紙大にて紙質は隨意たるべし
- 一 圖案は三十五年一月十一日午後三時迄に庶務掛に差出すべし

- 一 圖案用紙には姓名を表すべき文字を記入すべからず
- 一 三十五年一月十八日結果を發表し同時に賞金を贈與す
- 一 懸賞金は甲乙丙丁共各項一等二等に分ち一等金拾圓二等金五圓を贈與すべし
- 一 職員諸君よりも圖案を提出せられんことを望む 但し審査する限にあらず
- 一 審査終了の後應募圖案全部并職員提出の分とも併せて農商務省に提出し同省の採用する所となりて確定したる圖案には各項に就き別に相當の金圓を贈與すべし
- 一 從來の博覽會に授與せられたる賞牌及褒狀等の見本は參考の爲め文庫に備置きたれば就て參看せらるべし
- 一 應募圖案は總て返付せず

〔圖按〕 第一号。明治三十四年十二月三十日）

このような動きは当然のことながら図案科にも及び、指導体制の刷新が図られることになった。明治三十三、三十四年当時の図案科は東京美術學校本館裏手北西方向にあった孤立した一棟にあり、一階の疊敷教室が工芸図案に、二階の洋室が建築図案の教室に充てられていた。大正三年実施の図案科二部制の原形であるこの教室区分は、大沢三之助が起用された明治三十年にできたとされる（「図案科の回顧」大沢三之助。『東京美術學校校友會雜誌』第十九号。昭和十五年十月）。工芸図案の教室は今泉雄作、川崎千虎、島田友春、高屋肖哲、河辺正夫が指導し、建築図案の教室は武田五一が指導していた。このうち河辺のみは図案科の卒業生（明治三十二年）であった。

この指導体制は明治三十四、三十五年に一新され、工芸図案の教

師は河辺を残して全員辞任し、新たに島田佳矣が教授に就任した。

島田は絵画科（日本画）を明治二十七年二月に卒業し、東京高等工業学校図案科助教授をつとめていた図案家である。さらに、フランス留学から帰国したばかりの岡田三郎助が教授として加わった。建築図案の教室は河辺と同期図案科卒業の千頭庸哉が助教授として起用され、武田五一が留学のため辞職して大沢三之助が教授として再起用された。この人事には学校当局の図案教育刷新拡充の意図がよく現われているといえよう。ただし、小場恒吉の「図案科思ひ出」（99頁）などによれば、新しい西洋図案の導入による教育の大改革を期待していた生徒たちにとっては、この改革も姑息なものでしかなかったようだ。

明治三十年代の『東京美術学校校友会月報』には本校内外の懸賞図案募集の記事が頻繁に掲載されている。それらの高賞をさらったのは図案科生徒沢田誠一郎と十二町貞吉で、ともに明治三十八年に卒業。十二町は富山県工芸学校へ赴任し、大正八年死去。沢田は郷里の京都へ戻り、陶芸家沢田宗山となった。

⑦ 山田鬼斎死去

明治三十四年二月二十日、彫刻科教授山田鬼斎が病死した。享年三十八。二十二日、浅草吉野町光照院で葬儀が行われた。鬼斎は木彫部において木彫のほかに塑造による人体研究の指導にあたった（11頁高村光太郎の回想記参照）。夫人蝶子は岡倉覚三の妹であった。

⑧ 学生生活

美術學校生活

辻 永

中學校を出て美術學校に入つたのは、明治卅四年の春で、正式に洋畫の課程を修めたのである。それまで田舎（水戸）にゐた。中學校の圖畫の教師は丹羽林平氏（明治三十一年西洋画科卒）であつた。白馬會の會員で小林萬吾氏、白瀧（幾之助）氏、湯淺（一郎）氏達の仲間だつたのです。私は畫家に成る氣で、其の畫の先生の所にゐました。ほんとうの油繪を見たのは、其の先生の初めてで、今でも記憶してゐるのは、其の丹羽さんが横濱の原善三郎氏の大きい肖像を描いてゐた。それを見て非常に感心した。（恰度卅二、三年の頃）自分もあんな畫をいつになつたら描けるか只感心してゐるばかりだつた。そして、まあその先生の油繪具を借りて、中學校の庭から筑波山を、一、二度描いた。それが私が初めて油繪具を使ふ初めである。自分も珍しかつたし、その頃の學生に限らず、とにかく珍しいものだつた。この丹羽といふ人は割合に不遇で、先年なくなつたが、風裁が良い人で、それは餘談だが、女の人にさわがれなんどしてゐたのも、原因だつたかもしれない。私が丹羽さんの家にゐる頃、そのお母さんが、學校を出ても決してエカキなんてなるのをおよしなさいと、しきりに言はれたことがあります。

學校の教材として古・事・記といふ題で、何か書けと言はれた事がありました。その時私は例の「コジキ」^{（伝）}と思つて、巖窟に乞食がある所を寫生して大笑ひされたことがあります。

今でこそ中學生が油繪を描いても珍しくないが、とにかく今から卅年近く前のことですから、水彩繪具を使ふことさへも容易でな